

---

# ローズ・クィーン

ゆめゆめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ローズ・クイーン

### 【Nコード】

N9100Q

### 【作者名】

ゆめゆめ

### 【あらすじ】

それはね、昔々のお話なの。あなたは聴いてくれるかしら。銀色の髪に深紅の瞳の少女——サラ——は決して外へ出ることは許されなかった。国家魔術師のもとで軟禁？されていたサラはある日ヴァンパイアの長——ルシカ——に連れ去られ、目覚めたルーシェはいったい？ヴァンパイアから溺愛？ときどきシリアス？？

## 登場人物紹介（前書き）

ネタバレあります。随時加筆していきます。

## 登場人物紹介

サラ

銀髪に深紅の瞳。ケイトのもとで暮らしていた。本人自覚なしの美少女。

人間ではない？

ルシカの《薔薇姫》

ルシカが怖い。

ルシカ・トリニエ・フレスコヴァレリイ

ヴァンパイアの長。何故かサラをずっと探していた。黒髪に赤紫の瞳。見る者を惑わすほどの美形。

サラをずっと育ててきたケイトが嫌い。

サラを溺愛。

ケイト・クエンルン

国家魔術師。アンリエッタと婚約中。見た目20歳の童顔（31歳）サラを育てた？娘のように思っている。

サラを攫ったルシカが嫌い。

アンリエッタ・ルーファス

ケイトの婚約者。セクシー系。結構な姉御肌。

サラのことを妹のように思っている。

カイル・J・ゲイエティア

宰相を務める。

ルシカの幼馴染兼親友。

金髪碧眼で物腰がとても柔らかそうな雰囲気。

リオナ・クロディア

カイルの《薔薇姫》

ウェラ伯爵の娘。

サラの教育係兼親友になる。

赤銅色の髪に濃紺の瞳を持ったナイスバディで勝気な美女。

## プロローグ（前書き）

初めての小説で拙い部分も多くありますが、よろしくお願いします。

## ブローグ

ねえ、あなたなら、どの薔薇が好き？

白かしら？それともピンク？黄色や青？

どんな色でも揃ってるわよ。

好きな色をどうぞ。

- - -  
...

私？

私は赤い薔薇が好きだったの。

とっても好きだったのよ…

ねえ。あなたは聴いてくれるかしら。

あら聴いてくれるの？

ありがとう。今、話し相手がなくて寂しかったの。

みんな忙しくて、お仕事してるから。

かまってくれないの。

贅沢な悩みかしら？

あなたはいつ頃帰らなければならないの？

そう、ちょうどあの人の仕事が終わる時間ね。

じゃあ、お茶でもしながら聴いてね。

それはね、私がまだ15だった時とよのことよ。

## プロローグ（後書き）

まだ、わけがわかりませんね。主人公の一人語りです。次から本編入ります。よろしくお願いします。

まずは苗木を植えましょう。(前書き)

本編です。

まずは苗木を植えましょう。

「外に出たいなあ」

外から完全に隔離された部屋。

季節も天気も関係ない。

常に魔法で一定の温度、湿度、時間による明るさの調整がされている。

私はサラ、この部屋の主だ。

国家魔術師のクエンルン家で実験隊？被験体？とにかく、観察対象として置かれている。

退屈な毎日に変わらない環境。

でも、それも今日で終わり。

ふふふ。絶対ここから出て自にんるんだから！

コンコン

「サラ、今日の気分はどうか？体が熱いとか…喉が渴いたりしてない？」

ケイト様だ。

ケイト・クエンルン、国家魔術師で顔は綺麗だと思う。ちよっとウェーブのかかった金髪がやわらかそうなの。近々貴族のご令嬢と結婚する予定のはずだ。

「してないよ。どうして喉が渴かないといけないの？」

何を言い出すんだろう。

何故、喉が渴くなんて聞くのかわからない。

「…ケイト様は、私を何だと思ってるの？」

ケイト様は目をそらしたままだ。

「…」

「何かあったの？」

急にこんな事を聞くなんておかしい。

「ケイト様？」

「…ヴァンパイアが出たんだ。」

ヴァンパイア——吸血鬼——夜な夜な人の生き血を吸うっていう??  
信じられない、そんなの。

12

「聖域のふもとの王都に、ヴァンパイアなんか出るわけないよ。」

「嘘じゃない。それに…」

「それに？」

ケイト様は何が言いたいの？

「ヴァンパイアの長だ。王都に現れたのは。」

まずは苗木を植えましょう。(後書き)

次、長登場です！

まずは苗木を植えましょう。 2

「ヴァンパイアの長なんだ。だから、一応ね。」

ヴァンパイアの長。

夜の一族を統べる者。

美しく、残酷で、見る者を惑わす。

ヴァンパイア一族では絶対の存在。

「…だれか、見た人がいるの？」

「うん。誰も血は吸われてないけどね。」

「そっか。よかった。」

ヴァンパイアには二種類ある。

一つ目は普通のヴァンパイア。

血を吸われても化け物にはならない。

もう一つは貴族階級ヴァンパイア。

血を一度でも吸われてしまえば人ではいられなくなる。

ひどい時には人の形を保てなくなる。

長はもちろん後者だ。

人の形を保てないものは、近くにいる人から皆殺しにする。

狂気と欲望にのみ突き動かされる存在に堕ちる。

「ケイト様、私は何ともないから。アン様の所に行ってください。きっと不安な思いをしてるとおもう。」

アン様——アンリエッタ・ルーフアス——はケイト様の婚約者だ。

ときどき遊びに来てくれてお茶なんかをする。  
…たまにケイト様の愚痴を聞きながら。

「…ありがとう。アンも…」

「ケイト様？」

ガシャーン！！！

「やっと見つけた。薔薇姫。」

まずは苗木を植えましょう。 2 (後書き)

長...一言ですみません。次回こそは...

### まずは苗木を植えましょう。 3

「…は？」

たつぷりと間を取って、私の口から出たのはそれだけ。  
この人の頭は大丈夫なんだろうか？

「ヴァンパイアの長がなぜ王都にきた？」

…ケイト様怖いです。

状況を把握できていないサラには、なぜ二人が睨み合っているのかわからない。

窓から入ってきた不法侵入者さん（ケイト様曰くヴァンパイアの長）からは黒いオーラが出ている…ように見える。

「貴様には関係のないことですよ。」

「ここは私の家だ。部外者は貴方の方では？」

「俺のモノを隠していたのはどのどいつですか？まったく、見つけるのに苦労したんですよ。誰が王都にいるなんて想像しますか？」

…結構しゃべる人だなあ…

「あの？」

「…なんだ?!」

うわあ！美形の般若顔は迫力満点！！  
でも負けませんよ！

「私って何者なんですか？さっき『薔薇姫』とかって言っていました

けど。」

「貴女は知らされていないのですか？」

「…自分が『ヒト』とは違うことはわかってます。『ヒト』はこんな赤い瞳を持たないもの。」

自分が『ヒト』ではないことはわかっている。

ケイト様が私のことを本当の娘のように思ってくれていることも。

月に一度、国の役人が来て私が周りに「害」をなさないか、現状を聞きにきていることも。

被験体とか、自分がひねくれた考えをしていることも。

自分以外のことは、ちゃんとわかってる。

「サラは『ヒト』だ！」

「じゃあ、なんで？ずっと気になってた。どうして私は部屋から、屋敷から出てはいけないの？」

「それは…」

どうして黙っているの？

「貴女が『ヒト』ではないからですよ。」

ずっと、わかってはいても、受け入れられなかったこと。

他人から、言葉にして伝えられるのって結構キツイなあ…

勝手に涙があふれてくる。

「お話しはもういいですか？いつまでもこんな所においては気分を害します。」

「ならば、とつと闇に帰れ！」

「そうですね。でも…」

目の前に落とされる陰。

見上げれば不法侵入者（ケイト様以下略）。

そつと頬に触れられ、その手は思っていた以上に冷たいけれど優しい。

「その前に、『薔薇姫』は返して頂きますね。」

突然視界が暗闇に覆われ、体は空に放り出されたかのような浮遊感。意識を失う前、ケイト様の私を呼ぶ声と、誰かの「おやすみ」という声が聞こえた気がした。

まずは苗木を植えましょう。 3 (後書き)

初っ端からシリアスですみません。

しかも文章のつながりが上手くいきません。

次話、長視点です。

閑話 それは愛しむモノ side ルシカ

—— ルシカがサラを連れ去るちよつと前の話。 ——

「ルシカ様、もうそろそろ妻を娶られてもよろしいかと。」

夜の一族「ヴァンパイア」呼ばれる者たちの社会制度は、『ヒト』のそれと大差ない。

ただ、『ヒト』で言う「王」、つまりヴァンパイアの「長」の力は絶対で、いかなる者にも覆すことはできない。

「フレスコヴァレリイ」の血筋は最も多くの「長」を出している家系。

今代の「長」であるルシカ・トリニエ・フレスコヴァレリイもその一人である。

「またその話ですか。」

「皆、お世継ぎを楽しみにしているのです。」

どの重臣も考えていることは同じ。

ヴァンパイア社会において「フレスコヴァレリイ」は、「長」を出していない代でも重宝されていた。

それは、ほとんどが「長」に次ぐ力を持っていたから。

「フレスコヴァレリイ」はルシカの6代前から「長」の輩出が続いている。

重臣たちは姻戚関係を結べば、自分たちもそれなりの地位と力を得られると考えているのだ。

「お言葉ですが、ウエラ侯爵。俺はまだ125歳です。結婚は当分先で構いませんし、結婚するにしても相手は自分で選びます。」

「しっしかしですね！もう、長の「リオナ嬢」によろしくお伝えください。では。」

ウェラ侯爵の話を途中で遮り、会話を終わらせた。

部屋を出て行くルシカの背中を見るウェラ伯爵の瞳には、なんとも言えない感情が浮かんでいた。

「長、貴方の『薔薇姫』はもういないですよ。」

伯爵の炫きは、ルシカには届かなかった。

『薔薇姫』

それは「長」の半身、魂の片割れである。

代々の長はそれぞれの『薔薇姫』を伴侶に迎えていた。永遠にも近い命とともに歩むもの。

強い力を持った者たちには何故か必ず半身がいた。

どこにいても、なんとなく相手を感じることができ、失った時には計り知れない喪失感を得る。

ルシカは半身を感じることができない。いや、出来なくなってしまうった。

数年前の、『ヒト』との争いで消えてしまったのだ。

それからのルシカは、それこそ世界中を探し回っている。

「帰ってたのか？ルシカ」

「…これはこれは、宰相殿。どうしたんですか？」

「おい、その『宰相』ってのやめてくれ。背中がかゆくなりそうだ。」

「ふう。カイルは何か用ですか？」

宰相を務めるカイル・J・ゲイエティアはルシカの幼馴染かつ親友である。

己の『薔薇姫』を失い、今にも壊れそうなルシカを案じている。

「お前さ、まだ探してるのか？」

「当たり前です。」

「他の重臣のじじい共は心配してるぜ？」

「…今日もウエラ伯爵に妻を迎えろと言われましたよ。」

「言葉通りに受け取ったのか？ウエラ伯爵も心配してんだよ。俺らとよく遊んでくれた人が、権力欲しさにそんな馬鹿なこととは言わない。お前だってわかってんだろ？『薔薇姫』に代わりはいない。でも、お前は血を残さなきゃならないんだ。そろそろ諦めろ。」

「カイル、俺には彼女を感じる事ができない。けれど、喪失感はないんですよ。」

「…」

「どういふことかわかりますか？」

怒りに震える声。

感情を殺した表情。

カイルは、こんなルシカを見たことがなかった。

ルシカは己の『薔薇姫』を感じることはできないのに、喪失感はないと言う。

「…魔力が届くかない場所にいる…囚われてるのか？」

「世界中の城や神殿、聖域を探しました。残っているのは「王都」だけです。」

「王都」は神の国に最も近い場所。

魔に属する者にとっては入ることも困難な場所である。

「王都」かあ。マジで行くつもりか？」

「何を馬鹿なことを言ってるんですか？行くに決まってるでしょう。」

「まあ、せいぜい死なないで下さいよ、長。」

揶揄していても、カイルが本気でルシカを心配しているのは、その真剣な瞳が物語っている。

「俺を誰だと思っているんですか？」

「天下無敵のルシカ様でしたね。」

それから一月後、ルシカは「王都」から『薔薇姫』を連れ帰った。

閑話 それは愛しむモノ side ルシカ（後書き）

結構長くなってしまいました。

ルシカにとってサラはなくてはならない存在なんですね！

サラを連れ帰った後：サラが目覚めるまでの皆の反応。

ルシカ：私の『薔薇姫』ほど愛らしい者はいません！早く目を覚まして、私の名をこのかわいらしい口で呼んでください。

カイル：これがルシカの『薔薇姫』かあ。超好みなんだけど——  
——ちよつと！！カイル（怒）！！！！

ウエラ伯爵：ルシカ様の『薔薇姫』が、「あの方」が戻られた。今度こそ、命に代えても守らねば！！生きておられて、私はあああ（嬉泣）

ケイト様：サラ、どこに行ってしまったんだ？本当に大切に思っている。君を心から愛しているよ。

アンリエッタ：ケイト、悲しまないで。必ずまた逢えるわ。

部分的にナゾな発言がありましたが、これから徐々に解明されていきます。

ちなみに、ケイトの「愛してる」発言は、家族愛です。

## その薔薇の名は

ふわふわしてて、温かい。

私、どうしたんだっけ？

部屋を出る計画をして、ケイト様とお話しして、変な人に…

「変な人」に？

ぱちっ

目を開けると、昨日の不法侵入者さん（ケイト様以下略）が居られます。

そしてこれは抱きしめられてますか？

しかも、何故ハダカ？！

嫁入り前の純粋な乙女に何をしてくれるんですか！！

「やっと起きたみたいですね。おはよう俺の愛しい人。」

「オハヨウゴザイマス。」

何故にあなたはN.Oリアクションなんですか？！

もしかして、いろんな女の子に…

「緊張しているんですか？貴女はとてもかわいいですね。」

ちゅっ。

唇に柔らかい感触が一瞬。

これは、世にいう、キス？

反応を示さないサラに再び口づけるルシカ。

先ほどよりも深く、奪いつくすように。

「っん！…あ！」

ずっとケイトの屋敷の中で育ったサラはキスはもちろんその先のこともしたことがなかった。

あるのは恋愛小説を読んで知った知識だけ。

そんなサラは、キスの最中の息の仕方を知るはずもなく、絶賛酸欠中。

ちよつとお！いつまで続けるつもりなの？い、息が苦しい！

苦しさから逃れるようにルシカの胸を叩くも、止める気配はない。

意識がぼーっとしてきたころ、ようやくルシカはサラの唇からそれを離れた。

サラの目に入ったのは、二人が口づけていたことを示す、銀の糸。

いけないことをしてしまったような。

長い口づけに息が乱れ恥ずかしさに頬を赤く染める姿は、庇護欲を掻き立てるとともに、めちやくちゃに犯し尽くしたくなる。

「ふふつ。誘っているのですか？」

「っやあ！」

初めてのキスという乙女の憧れを、夕日がきれいな花畑で初めてキスするのを夢見ていたのに。

やりきれなさからか、悔しさからか、サラの瞳からは涙があふれ出した。

さすがにルシカもこれには動揺した。

「サラ？！」

「っう…昨日から何なの？！た、確かに私だって部屋から出て、外の世界を知りたかったけど！！っふう！変態に連れ去られて、拳句の果てにお、乙女のファーストキスを奪われるなんてえ！！！」

踏んだり蹴ったりだ。

## その薔薇の名は 2

小説本文 朝のすがすがしい空気の中、とある城のとある寝室にて。

「近づかないで！変態い！！」

「変態じゃありません！」

ベッドの上で繰り広げられるサラとルシカの攻防戦は正味一時間ほど続いている。

壁まで、つまりベッドの端まで追いつめられたサラに逃げ場はない。

「おい、ルシカ？起きてるか？」

ルシカの指先がサラに触れようとしたとき、まさに救世主とも言える人物が現れた。

ルシカの幼馴染兼親友で宰相を務めているカイルである。

「あ！『薔薇姫』ちゃん目が覚めたの？」

「…あの、どちら様ですか??」

ルシカと同じくらい美形だが、物腰の柔らかそうな人だ。

ルシカの黒髪と違い明るい金髪だからそう見えるのだろうか。

しかし、そんなことよりもこの危機的状況から救ってくれたことに感謝したい。

「はじめまして。俺はこの変態の幼馴染で親友のカイルです。」

「…や、やっぱり変態なんですね。…つぐす。」

「え”?!」

ちょっと！この子泣きだしちゃったんだけど！  
いや、俺が来る前から泣いてたよな、ってか、ルシカが超怖いんですけど…。

「ば、『薔薇姫』ちゃん、泣き止まないと話ができないよ？」  
「ぐすつ…つうええ…。」

泣き止まないサラをルシカは抱きしめた。  
それは優しく、ルシカはサラを安心させようとしたことだったのだが…  
抱きしめた瞬間サラは硬直し、現在部屋の隅でうずくまっている。  
ルシカは不機嫌と哀愁を漂わせ、カイルはサラの怯えように啞然としている。

「…お前さあ、何したわけ？」  
「悪いことはしていませんよ。ただ口づけしただけです。」

ただのキスでここまで拒否されるなんて、相当なキスだったんだろうな。

カイルはルシカを横目にサラに近づき、優しく頭をなで始めた。

「大丈夫？とても怖かったんだね。良い子、良い子。」

優しく頭をなでる手とその言葉に安心したのか、サラはカイルに抱きついた。

この人優しくて、ちょっとケイト様に似てるな。  
サラの目から涙が止まった。

「…面白くありません。何故カイルに抱きつくんですか？抱きつく

なら俺にしなさい！」

「いやあああああ！！離して！！離せ変態！！」

「離しません！それに俺は変態じゃない！！ルシカと呼んでください！！」

「イヤ！」

カイルとサラのラブラブ？な様子にルシカは居ても立ってもいられなくなり、カイルにしがみつくサラを無理やり抱き上げたのだ。

「ルシカ、この子お前に怯えてるぞ。」

「カイルには関係ありません。」

ルシカの懔然とした態度にカイルは溜息しか出てこなかった。

### その薔薇の名は 3

カイルの「お腹空かない？」発言により、食事をしながらの話し合いとなった。

のほほんものの……

「サラちゃんの好きな色は？」

「白。」

「何故カイルの質問には答えるんですか?!」

「……。」

サラはずっとルシカを無視し続け、カイルの質問にしか答えない状況が続いている。

ルシカの不機嫌は目に見えて酷くなっていき、終には嫌がるサラを自身の膝の上に乗せて逃げられないようにした。

もちろんサラは大暴れ。

今現在おとなしくしてはいるものの、目には溢れんばかりの涙が溜まっている。

「サラちゃんはどうして『王都』にいたの？」

「お、『王都』って何ですか？」

部屋から出たことのなかったサラは、外の世界を知るはずもなく、また、与えられていた本には「聖」や「魔」についての情報がほとんどなかったため、「王都」や「バラ姫」、闇の一族と呼ばれる物たちの知識はほとんどなかった。

「えっと、何で国家魔術師の家にいたの？ずっと監禁というか軟禁されたんでしょう？」

「知らない。小さなときからいたし、外に出られなかったのは私が『ヒト』じゃなかったから。でも、ケイト様は優しくったし、アン様も妹みたいに大切にしてくれた。私早く帰りたい！きつと心配してる。」

ケイト様が私を部屋から出さなかったのは、人々の好奇の目や蔑みから私を守るため。

外に出たと思って思った罰なのかなあ。

こんな形で外に出て、ケイト様きつと心配してる。

「帰しませんよ。」

耳元で無情な声が聞こえた。

無意識にその瞳を見れば、今にも捨てられそうな子猫のようで、サラは言葉を紡ぐことができなかった。

「ごめんね、サラちゃん。たぶん君はこの世界に来たことで『ヒト』からは脅威の対象と見なされたはずだ。」

「そ…んな。私は望んでここへ来たわけじゃない！」

「それでも、ですよ。彼らにとっては理由なんてどうでもいいんです。貴女のいうケイトやらが守っていた『ヒト』でないものを排除できれば、理由なんてなんでもいいんですよ。いなくなってしまうえば、後から何とでも言えますから。」

この世は何と残酷なのだろうか。

望んでいないことでも、それが世界の全てになってしまう。

私には帰るところも、暖かく迎えてくれる人も、もういない。

「サラちゃん、泣かないで？サラちゃんはこっちの世界に帰ってきただけなんだから。」

## その薔薇の名は 4

「帰ってきた、ってどういことですか？」

私はこの人たちと同じ存在なの？それならケイト様が私に尋ねたこともなんとなくわかる。

カイルが口を開いた瞬間、この部屋に第4、第5の人物が現れた。耳をつんざかんばかりの扉を開く音とともに。

「ルシカ様！『薔薇姫』がお目覚めになられたとお聞きました！  
！」

「カイル！ルシカ様の『薔薇姫』ちゃんはどこにいるの？！」

赤みがかった金髪の美青年に赤銅色の髪のナイスバディな女性が乱入してきたのだ。

二人の共通点は濃紺色の瞳。

「……きゃあああつ！この子がそうですのね？なんて可愛らしいんですの？！ルシカ様なんてやめて私にしませんこと？？」

「リオナ、口を慎みなさい。」

「えっと、御兄妹ですか？」

「この二人は親子ですよ。」

「は？えええええ？！」

どう見ても、血が繋がっていることは明らかだが、誰がこの二人を「親子」だと思うだろうか。

乱入してきた二人はウェラ伯爵と、そのご令嬢らしい。

「やはり、あのお方にそっくりですなあ。」

いや、話が見えませんか。

「あのお方って誰ですか？」

「とても美しい方たちでした。貴女様のご両親です。我々が不甲斐なかったばかりに、あのようになっちゃってしまっ。跡には貴女様のおられた形跡がなく我々は途方に暮れました。その当初はルシカ様に会わせる顔もなく。既に亡くなられていたものとはかり思っておりましたが、今度こそ、万全を期してお守りいたします！」

「…。」

つまり、私の本当の両親はすでに死んでいるってことね。

どんな人たちだったんだろう。

一度でいいから、会ってみたかったなあ。

「初々しくって可愛いわあ。持って帰りたいくらいですわ。」

重苦しい空気に負けず、KYな声が聞こえてきた。

頬を染め、きらきらとした瞳で私を見てくるナイスバディなお姉さま。

どうやってそんな爆弾ボディになれるんでしょうか？

「サラはあげませんよ。」

「あら、ルシカ様には聞いていませんわ。ねえ、カイル？この子を私たちの養女にしませんこと？」

「それは名案だね。けど、ルシカはたぶん許可しないよ。」

私を無視して会話を続けないうください。

それに「私たち」って…

私の他に啞然とする方々、二名。

ルシカと、ナイスバディなお姉さまの父親である。

「…リオナ、お前『薔薇姫』だったのかい？」

「あら、言ってますでした？」

コミュニケーションは大事ですね。

「申し訳ありませんでした、ウエラ伯爵。」

「謝らないでください！私も知らなかったのですから。」

リオナさんがカイルさんの「薔薇姫」という事実が明らかになり、  
何故か変態とおじさまが気まずそうに謝りあっている。

それはそれで、私はいつまで変態の膝の上にいなければならないの  
でしょうか？

## その薔薇の名は 5

とりあえず、私の後見人にウエラ伯爵がなるということで話は落ち着いたところだ。

「ところでサラ、俺たちの結婚式はいつにしましょうか？」

「はい？」

結婚？俺たち？

話が飛躍しすぎて処理できません。

「あの、なぜ結婚なんですか？」

「『薔薇姫』とは唯一無二の存在で、自分の全てを無償で捧げたいと思う相手です。それに、その血はどんなものよりも甘美なんですよ。そんな相手を何故他の男にあげなければならぬのですか？」

「でも、私はあなたに特別な感情なんて持ってない。」

「それはそうでしょうね。『薔薇姫』は半身の血を飲まない限り、覚醒することはありませんから。」

ということは、私がこの人の血を飲まなければ結婚を断固拒否できるのかな……

結婚はやっぱ好きな人になりたいし。

「まあ、いざとなれば無理やりにも飲ませてしまえばいいんですよ。そうすれば、サラは俺のものになるしかありませんね。」

そんな考えを読んでいると言わんばかりにルシカはサラの逃げ道を塞いだ。

「ルシカ様！かawaii女性に対してその態度はいただけませんわ！」  
「無理やりはよくないよね。」

「そうですね！それに、『薔薇姫』は自然と時が来れば半身の血を  
求めるようになりますので安心して下さいな。無意味にサラちゃん  
を傷つけることはありませんわ。」

冷たい汗が背中を流れる。

どうして私が血を飲むこと前提で話が進むの？

いや、もしかしたら私を助けてくれる策かもしれないよね！

「…いつ頃から血を求めるようになりますか？」

「そうですね。体が成熟してきたら、ですわ。見たところサラち  
ゃんはまだまだ成長途中のようですね。個人差もありますので、時  
期はわかりませんわ。」

「そうですね。」

永遠に來なくて結構です。

私は自由恋愛で結婚したいんです。

自由恋愛バンザイ！！

「ところでルシカ様、サラちゃんと二人でお話をしたいのですが、  
よろしいですか？」

「今会ったばかりなのに何を話すことがあるんですか？」

確かに。

でも、この膝から降りられるならばなんでもいいです！

ヘルプ・ミー！！

「殿方には秘密の話です。ガールズトークというやつですね。」

その薔薇の名は 5 (後書き)

ルシカの一人称を「私↓俺」になおしました。

## その薔薇の名は 6

「はじめまして、私はリオナ・クロディアと申します。」

「は、はじめまして！サラです。」

半ば無理やり男性陣を部屋から追い出した後、リオナさんとやらとガールズトークをする破目に。  
いったい私は何がしたいんだろうか。

「うふふ。そんなに緊張しなくてもよろしくてよ。」

と言われても、目の前にボン・キュッ・ボンの超絶美女がいたら、緊張の一つや二つくらいしますよ。

逆に、この人を目の前にして見惚れない人を見てみたい。

「ふふ。ルシカ様は私に見惚れませんでしたわよ。ついでにカイルも。」

「えっ、恋人をついで呼ばわりしちゃうんですか？」

「ついででよろしくてよ。だって、あの方、私を初めて見たとき何て言っただと思います？」

何て、と言われてまして。

どう見てもらぶらぶな空気がしてたんですが…

「…想像がつきません。」

「あの方、『うん。俺はもっとちっちゃくて、守ってあげたいよ  
うな小動物系の美少女が好みなんだけど。仕方ない、運命には逆ら  
えないからね。』と言いましたのよ！！」

「酷いですね。」

「でしょう?! その後は、有無を言わせず血を吸われて、散々でしたのよ。」

「血を吸われると何かあるんですか?」

気になることは聞いておかなければ。

後で取り返しがつかなくなってしまうてでは遅いのだ。

「吸血行為は愛の行為ですの。」

「あ、愛の行為ですか?」

「そうですね。簡単に、気軽にしていよい行為ではありませんの。」

「はあ。」

「だから、「お手付き」ということを周りに示すために血を吸うんですの。」

吸血は軽々しくしてはいけないってことね。

「お手付き」なんて、何をされるのか怖い!

「周りに示すって、何か目印があるんですか?」

「そうですね。目印というか、匂いがするんですの。」

「? 匂いなんかでわかるんですか?」

「血を吸った相手、私で言えばカイルの、あなたで言えばルシカ様の魔力を纏うんですよ。自覚症状はありません。」

「∴私が血を吸われているのか、リオナさんにはわかりますか?」

どうか神様!

私の不安を拭い去ってください!!

「残念なことに、もう既に血を吸われていますわ。」

ああ、私はどうしたらいいのでしょうか。

## その薔薇の名は 6（後書き）

説明的であまり進みませんでした。既に血を吸われてたんですね。  
次話ではサラが…

お気に入り登録ありがとうございます。拙い文章ですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

その薔薇の名は 7 (前書き)

遅くなってしまうかもしれません。

## その薔薇の名は 7

「サラ、ここを開けてください！」

激しく扉を叩くルシカを無視して、サラは与えられた部屋のベッドにもぐり込む。

サラに与えられた部屋は白を基調とした落ち着いた部屋だ。

リオナと話した後、サラは今の部屋に案内された。

その後は今のとおり、引きこもった。

「…理不尽だわ。」

私は大人しくこのまま変態と結婚しなければならない運命なのだろうか。

「それに、喉が渴いてきた…」

これが、リオナさんの言っていたことなのだろうか？

半端なく苦しいんですけど！

どれくらいの時間がたったのか、「カチャリ」と鍵を開ける音が耳に届いた。

「…はあ、誰？」

「いつまでたっても出てこないの、強行手段を取らせていただきました。」

「…サイテー。」

ドクン、ドクン

鼓動がうるさい。

さつきよりも乾きが酷い。

どうして？ルシカのせい？

「サラ？」

もう駄目、我慢できない！

それは無意識にも近かった。

ルシカに抱きつき、その首元に顔を寄せる。

甘美な薔薇の香りに、自分がこの香りに次第に酔って行くのを朦朧とした頭の端で感じた。

——欲しくてたまらない——

後先なんて、もうどうでもいい。

今は、この人の血が欲しくてたまらない…

赤い小さな舌で首を舐め、ゆっくりと、牙を立てて行く。

「…んう…っはあ」

コクリとサラが己の血を吸っている現実にかイルは理性を失わないように必死だった。

「…っ！よほど、飢えていたようですね。まあ、王都に居れば…それもあり前でしょうね。」

サラの頭を優しく撫で、カイルはその後もしらさが満足するまで血を与えた。

…結果…

「ご、ごめんなさい！私、止めなくて。」

「いいんですよ。ああ、許してあげる代わりに、俺のことを名前ですんでください。」

ルシカ、只今貧血中。

自分の血を吸うサラが可愛すぎて、ついつい止めるのを忘れてしまったのだ。

本音を言えばサラの飢えを満たしたかったので、結果は万々歳だ。

（ルシカにとっては。）

「…サラちゃん、こいつは自業自得だからさ、そんなに負い目に感じなくていいよ。」

「そうですね。いくらサラちゃんが飢えていたからと言って、無茶のしすぎですわ。」

「…あなた達はいつまで滞在するつもりですか？」

不機嫌さを隠そうともせず、二人を睨みつけている。

私のせいだね。

カイルさんもりオナさんも私のことを思ってくれてるし、止められなかった私が悪い。

「ルシカ、ごめんなさい。」

「！！！！」

素直に名前を呼んだのに、何故そんなにも驚いた顔をするんでしょう。

やはり、変態の思考回路は理解できないわ。

その薔薇の名は 7 (後書き)

ルシカとカイルの名前がごちゃまぜになってしまいます。

## 愛でて育てましょう

いえ、悪いのは私だってちゃんとわかってますよ。  
わかってはいるんですけど…

今私がいるのはルシカの上です。  
なぜこうなってしまったのか、それはほんの数分前の出来事からです。

「ルシカ、まだ体だるい？」

自分のせいで寝込んでしまうことになってしまったルシカに罪悪感を感じる。

私の体は吸血前と変わっていた。

まず第一に、頭では変態とわかっていても本能的にルシカの傍にいたいと思ってしまう。

それに対して嫌悪感もなく、自分の中にしつくりと収まっている。

第二に、何故かルシカに血を吸ってほしいと思ってしまう。

第三に、ルシカがどこにいるのかなんとなくわかってしまう。ほかの人に対しても同じなのかと思ったら、ルシカ限定だった。

これが、『薔薇姫』として覚醒する、ということなのだろうか？

「ふふ。心配してくれるのですか？」

「だって、私のせいだし…」

「…そうですねえ。」

？気のせいだろうか。

ルシカの空気が、変わったような気がしたんだけど。

「サラ、俺も喉が乾いてしまいました。」

「ふえ？」

わかってます。

ベッドの淵に座っていた私が悪いんです。

ルシカの不穏な空気に気付けなかった私が！

「ルシカ?!」

一瞬のうちに私はルシカの膝の上に移動させられていた。  
ベッドの上に向かい合って座っている状態に、サラの顔は真っ赤になる。

なんとかして逃げようとするも、思ったように体が動いてくれない。  
恥かしくてたまらないのに、心のどこかで、このままと思ってしま  
う私がいる。

「潤して下さいね。」

「え？」

考える暇なんて与えられなかった。

一瞬の痛みと、今までに感じたことのない甘美な体の疼きに思考が  
うまく働かなくなる。

——ナニコレ？キモチガイイノ？——

燃えるように、溶けるように、体が熱い。

「っあ...やあ...あ、もつと...」

もつと？

私は今、何を言ったの？

ルシカもサラの言葉に、しばし血を吸うことを忘れてしまったほど驚いたようだった。

「やつ！今のは違うのー！！」

「いえ、違います。」

ばつちりとルシカの耳に届いたようで、訂正しても後の祭りだ。恥ずかしい！！

穴があつたら、無くても穴を掘って潜りたい！！

「安心してください。これから、永遠にも等しい時間、何度でも貴女の血を頂きますから。」

「…はい。」

甘い誘い。

一度知ってしまったえば、一度堕ちてしまえば、もう戻ることができない。

吸血の名残に身を任せていたサラは気付いていなかった。ルシカの瞳に別の欲が潜んでいたことに。

「サラ、俺の『薔薇姫』」

「ひゃあ！やめっ…あ！」

気付いた時にはもう遅い。

## 愛でて育てましょう 2

体のあちこちが痛い。

ただ、心配して見舞いに来て、喉が渴いたから今度は私がって思っ  
て身を任せたのに。

「大丈夫ですか？」

「…だ…ぶじゃ、ない。」

どうやらルシカは本気で心配しているようだが、心配するなら初め  
から止めてほしい。

今日一日はまともに声が出そうにもない。

「本当にすみません。もう少しの間だけ抱くのを我慢しようと思っ  
ていたんですが、やはり本能には勝てませんでした。」

「？」

「ああ、サラは知らないんですね。吸血行為には催淫効果があるん  
ですよ。血を吸ったときと吸われた時、体が熱くなったでしょう？  
だからしばらくの間我慢しようと思っていたんですが、貧血のせいで  
通常時以上の催淫効果が出てしまったようです。」

「…そう。」

ああ！！

思い出しただけでも恥ずかしい。

ファーストキスも処女も、あっさりと奪われてしまったあ！

「サラ？」

思うように話せないことが恨めしい！

涙が出ちゃう。

今の私に出来ることは睨みつけることだけだ。

私の睨みに気がついたのか、ルシ力が私の頬にそつと触れ、何故か再び組み敷かれている。

「どうしたんですか？ そんなに物欲しそうな顔をして。もしかして、まだ足りませんか？」

「っやあ！」

「そうですね。あと、2回ほどの時間はまだありますね。」

無理だ！！これ以上やれば確実に死ぬ！！

有無を言わさず一晩中したのに、まだ出来るの？

「む、りい！」

「そうですねえ、なら、1回にしておきましょうか。」

「っやああああ！！！！」

どれだけ抵抗しても、男と女。

もう、指一本動かすのも億劫になってきた。

初めは、ケイト様のところから攫われるようにここに来て、『薔薇姫』だとか何とか言ってファーストキスを奪われて、結婚の話になつて、抱かれて、流されるようにして今にいる。

その中に、私が選んだことなんてない。

全てされるがままで、私の意思なんてどこにもない。

本当なら、恨んでも、憎んでもいいはずなのに、どうしてか出来ない。

それは私があの人「薔薇姫」だからなのかわからない。

私を一途に思ってくれているあの人に対する、何とも言えないあた

たかな気持ちだけは、私自身のモノだと思いたい。  
この気持ちは何なのか、今はまだしらなくてもいい。  
いつかきつと、自然とわかる日が来るだろうから。

思考はそこで途切れる。

サラが動けるようになったのは昼過ぎ頃になってからだった。

愛でて育てましょう 2 (後書き)

やっちゃんいました。ルシカは肉食系です。

美しい華には棘があります。

「うーん。だいぶ様になってきたねえ。」

「嬉しくないです。」

現在私は例の如くルシカの膝の上に居ます。

近頃、私の定一になりつつあるのですが、恥ずかしいです。

ここに来て、早1ヶ月。

今日は私の通う「学校」についての話し合いで、後見人のウエラ伯爵が訪ねてきている。

「何故、ここにカイルとリオナ嬢がいるんですか？」

「あら、私たちがいて、何か不都合でもありませんか？」

「俺たちだつてサラちゃんが大切だからさ、話し合いを聴いていてもいいだろう？」

「申し訳ありません。」

「…聴くだけならかまいません。」

ルシカはウエラ伯爵には弱いんだよね。

あの二人もそれを知っていて付いて来たんだろうなあ。

「サラ様はローザリアスト女学園が一番最適かと思えます。」

「ローザリアストですか。」

「貴族の令嬢が多く通っているのです、サラ様の社会勉強にはよろしいのでは？」

「そうですねえ。格式ばっていますが、この先のことを考えるとサラには良い勉強になりますね。」

ローザリアスト女学園って、お嬢様学校なんだ。

ん？リオナさん、顔色が悪い気がする。  
気のせいかな？

「リオナさん、気分でも悪いの？」

「っえ？！」

「そういえばリオナもローザリアストだったよね？どんな学生生活だった？」

私がお嬢様学校に通うことは決定のようだ。

こんな身近に先輩がいるなんて、いろいろと話を聞いておかないと！

「リオナさん、私も知りたいです。」

「…リオナ嬢？」

「ええっと！私がお教え出来ることはありませんわ！サラちゃんが実際に通って、学園生活を実感したほうが楽しいですわよ？！」

自分で感じる、か。

確かに、新しいことにはチャレンジしないと前に進めないよね。

「ありがとうございます。学園生活がとっても楽しみです！」

私がこの言葉を後悔するのは、もう少し後の話。

S i d e リオナ

私の学園生活は悲惨だった。

爵位はもちろん、「薔薇姫」であるか、それが誰のものか、女の権力争いばかりだった。

それは陰険ないじめばかりで、私もカイルの「薔薇姫」であること

を秘密にしていた。

カイルは学生の身でありながら、政に参加していたし、ルシカ様とは幼馴染兼親友で、ここだけの話、いとお士でもある。

しかも、癒し系の美形ときたら、モテないはずがない。

標的にされるのは嫌だもの。

なんだかんだで穩便に学園生活を送ったけれど、何人も学園を辞めていく令嬢方を見てきた。

さすがに、ルシカ様もお父様も、サラちゃんの身分を隠して入学させるようだけど…

バレたときが大変なのに。

私がこの話をしようとしたら、ルシカ様はサラちゃんに気付かれないう鬼の形相で睨んでくるし！

どうか、サラちゃんは平和な学園生活が送れますように。

それにしても…

「ルシカ様の○× ≠ § ¶！！！！」

「リオナ？！！」

美しい華には棘があります。（後書き）

学園へ通います。ルシカは鬼畜入ってます。

美しい華には棘があります。

2

——ローザリアスト女学園

貴族のご令嬢が大半を占める学園。

「忘れ物はないですね。」

「…ルシカがお母さんみたい。」

「俺は母ではなく婚約者です。」

私が学園を卒業するまで、とりあえず「婚約」という形に収まった。まあ、いずれは結婚するんだろうけど。

でも、前よりも嫌じゃないかな。

それよりも、今日から楽しみにしていた学園生活が始まるのだ。

リオナさんに話は聞けなかったけど、自分で体験して感じたらとても新鮮だよね！

「いつてきます。」

「くれぐれも、自分の生活について話してはいけませんよ。」

「わかってます。」

「いつてらっしゃい。」

どうして、話しちゃいけないんだろう？

——…

いいですか？

サラが王都で生活していたこと、俺と生活していること、「薔薇姫」であること、その相手が俺であることを第三者に言うてはいけませんよ。

なんて、意味不明なことを云いつけられた。  
いけないことなのかなあ…

馬車に揺られること約30分。

色とりどりの薔薇が咲き誇り、格式の高さを感じさせられる校風。

「ここが、私がこれから通う学園。」

「サラ様、いつてらっしゃいませ。」

「はい、いつてきます！」

広大な敷地に、豪華なのに落ち着いた雰囲気の校舎、庭園にはいく  
つか東屋もある。

まずは、理事長室に行かないと！

誰か、生徒はいないのかなあ…

「御機嫌よう。見慣れない顔だけれど、貴女転入生ですの？」

「はい。今日からここに通うんです、理事長室がわからないんです。  
教えてもらえますか？」

「…貴女、どこのお家の方？」

「え？」

「その言葉づかい、貴族の令嬢にあるまじき言葉づかいですわ！嫌  
ですわ、汚れて今います。貴女とお話することはありませんわ。」

何？この人…

ム力つくんだけど…

「それでは。」

「…」

「ふん。挨拶もできませんのね。」

そういつて颯爽と立ち去っていく、どこぞのご令嬢。  
私、この学園でやっていけるんでしょうか。

さ迷うこと1時間、つようやくたどり着きましたよ、理事長室に。

コンコン

「どなた？」

「今日から転入するサラ・ルノールです。」

「どうぞ、お入りになって。」

「失礼します。」

理事長は私と同じ銀髪だった。

瞳は深い紫色。

どこか懐かしい感じがする。

「はじめまして、私はマリア・ルノール、貴女の祖母です。」

「…私の、おばあ様？」

ルシカもウエラ伯爵も知っていたの？

両親の姓を教えてもらって、その名前で転入手続きをした。

ふわりと、優しい香りが私を包み、優しい腕が、私を抱きしめる。

「信じられません。あの娘たちの子が生き残っていたなんて。もう一度貴女に会いたかったわ。」

「…おばあ様。」

たくさん話をした。

おばあ様は、ルシカとウエラ伯爵から話を聞いていたようで、何度も涙ぐんでいた。

「サラの名前は偽名を使いましょう。」

「偽名？どうして？」

「自分の身を守るためです。ルノワールでは、私の血縁者とすぐにわかってしまいます。そうですね、シアンデルにしましょう。」

今日からの学園内での私の名前は「サラ・シアンデル」になりました。

身を守るためって、この学園は危険がたくさんあるのかな？？？

学園生活、スタート♪

美しい華には棘があります。 2（後書き）

祖母が登場。 波乱の学園生活スタートしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9100q/>

---

ローズ・クィーン

2011年3月14日03時37分発行